

(東京都・成瀬功さん)

アイヒマンのような人間が支配する日本の教育の現状

「全体主義の起源」「人間の条件」などの著作のあるユダヤ人の政治哲学者アーレント(1906年～1975年)は、ユダヤ人絶滅に最も重要な役割をしたナチスドイツの官僚アイヒマンの裁判を傍聴した。未曾有の破局の世紀を生き抜いた彼女は、全体主義と対決し、アイヒマンの「悪の陳腐さ」を問うた。

アーレントはドイツに生まれ、ナチスドイツの台頭する中で、幾重にも重なる困難の中アメリカに亡命した。

ナチスによる「ユダヤ人問題の最終的解決」(ホロコースト)に関わり数百万人の「ユダヤ人」を強制収容所に移送したのがアイヒマンだった。彼はそのことに何の痛痒も感じることなく、事務的仕事として処理をした。彼は亡命先の南米で逮捕された。イェルサレムで裁判にかけられた。その全て立ち会ったのがアーレントであり、「イェルサレムのアイヒマン——悪の陳腐さについての報告」がその記録だった。

ハンナ・アーレントは「アイヒマンを極悪非道な怪物的悪人ではなく、どこにでもいる普通の人」として描いた。何も良く考えない単なる歯車の一コマの官僚でしかない。

「アイヒマンという人物の厄介なところはまさに、実に多くの人々が彼に似ていたし、しかもその多くの者が倒錯してもいずサディストでもなく、恐ろしいほどノーマルだったし、今でもノーマルであるということ」

「普通の人」が組織の一員としてこれほどの犯罪を自ら犯罪者として自覚せず、「罪悪感すら感ずる」となく実務的に遂行する。「あるいはできる」ことの恐ろしさだ。

土肥裁判(関連情報:<http://www.dohi-shien.com/html/>)の判決の根源的な過ちは、アーレントが指摘した問題だ。官僚組織の中にあった。理不尽な上官の命令に従わねばならないのか。判決は、「従わなかった土肥氏に問題ある」とした。

アイヒマンの裁判でアーレントが見たものは「怪物的な悪の権化」ではけっしてなかった。「思考の欠如した」官僚だった。アイヒマンは、「紋切り型の決まり文句や官僚用語」をくりかえすその答弁だった。アイヒマンの話す能力の不足は、「考える能力」、「誰か他の人の立場に立って考える能力」の不足にあると指摘した。裁判官も、都教委の官僚組織の人間も同じ過ちを犯している。

素晴らしいと思ったのは、アーレントがアイヒマンに呼びかけた。「君が大量虐殺の道具となったのはひとえに君の逆境のためだったと仮定してみよう。その場合にもなお、大量虐殺の政策を遂行し、それ故積極的に支持したという事実は変わらない。というのは、政治というのは子供の遊び場ではないからだ。政治においては服従と支持とは同じものなのだ。そしてまさに、ユダヤ民族および他のいくつかの国の国民たちとともにこの地球上に生きることを拒む——あたかも君と君の上官がこの世界に誰が住み誰が住んではならない

かを決定する権利を持っているかのように一政治を君が支持し実行したからこそ、何人からも、すなわち人類に属する何ものからも、君とともにこの地球上に生きていたいと願うことは期待し得ないとわれわれは思う。これが、君が絞首されねばならぬ理由、しかもその唯一の理由である」と。

アイヒマンがナチスによるホロコーストの実行者のひとりだった。そのことが有罪であり絞首刑に値すると述べているのではないのです。本来はあり得たもう一人のアイヒマンの存在が仮定される。

「日々の糧を得る」ためにナチス政権下での「昇進の道」を捨て、人間としての良心に従い、上司から命令された非人間的な業務の遂行を拒否し、困難な人生を敢えて選択することを選ばなかったところにアイヒマンに罪がある。彼は別の道を選択する自由があったにもかかわらず、決してそのような道を選択はしなかった。選択する自由の中で、自ら大量にユダヤ人を虐殺する側の人生を選択したことに全責任がある。

アーレントはそのような選択をするアイヒマンを仮定している。現実的な「生活と栄達」を「他者の不幸の上に築いた」道をアイヒマンが選んだことに全責任がある。選んだことの罪。陳腐な道を選んだ、アーレントは、それ故に死刑を宣告した。

「無思考の紋切り型」の言葉は、「現実から身を守る」ことに役立つ。ナチスによって行われた巨悪な犯罪が、悪魔のような人物ではなく、思考の欠如した人間によって担われた。土肥裁判の最大の誤りはそこにある。まさしく個性を失った官僚の答弁に従って、無思考に語るものに従った判決であり、裁判官がすでに『アイヒマン』になっている。

アーレントにとって、人間の無用化をはかったナチスの犯罪は、ユダヤ人に対する犯罪というよりも「人類に対する犯罪」だった。

政治によって生きる価値のない人種が定められ、官僚によって行政的に大量の人々が殺戮されるという現代の悪は、アーレントにとって許されざるものであった。

アーレントは、20世紀に起こった現代的な悪が、表層の現象であることの恐ろしさにあると語った。「悪の凡庸さ」という言葉で「今世紀最大の災いを矮小化することほど、自分の気持ちからかけ離れたものはない」と。

「底知れない程度の低さ、どぶからうまれでた何か、およそ深さなどまったくない何か」「それがほとんどすべての人びとを支配する力を獲得する。それこそが全体主義のおそるべき性質である」とアーレントは訴えた。

今の日本の底知れない程度の低さ、テレビだけではない、裁判官のことなかれ主義の軽薄な在り方をそこに見る。人間の重み、威厳は何処にも見えない。紛争を回避し、平穩無事であることをなにより優先し、何も考えない官僚的組織人間でしかない。

「思考の欠如」とは、表層性しかないということでもあった。怪物的なものでも悪魔的なものでもない、表層の悪が、人類にたいする犯罪、人間をほろぼしうような犯罪をもたらす。これこそが前代未聞の「現代の悪」のありようだ。彼女の導き出した結論ではそ

こにあった。

東京都の教育の現状は、完全にファシズムの状況にある。「ものごとの表面に心を奪われないで、立ち止まり、考え始める」人間らしい人間、そうした教員を黙らせることしかしていない。土肥裁判の持つ根本的問題はここにあるが、裁判官がすでにアイヒマンの一人になっていた。アイヒマン的人間しか裁判官になれない。

アイヒマン論争においては、アーレント自身が、そうした、自立的な思考をつらぬいた。彼女の事例は、表層的になった社会のなかで自立した思考が孤立するとき、生きることはどれほど過酷で、思考はどれほど勇気を必要とするかを明らかにした。

土肥裁判は、現代の教育に対する根底からの問いかけであり、警鐘だ。また土肥校長の様な校長は稀だ。それは現代の教育だけではなく、ファシズムになった現代社会への警鐘だ。

成瀬功